

今年度は令和5年5月4日(木)から令和5年5月14日(日)にかけて関東高等学校体育大会サッカーの部千葉県予選が行われ、各チームが鎬を削り合った。優勝は八千代高校、準優勝は千葉明德高校、3位は日体大柏高校、習志野高校という結果になった。

【今大会を振り返って】

出場校の所属リーグの観点から見ると、昨年度はベスト8が全て1部から2部に所属するチームであったが、今大会では4部所属の柏南高校がベスト8に入ったこと、2部所属の千葉明德が1部所属の専修大松戸、中央学院、日体大柏を破り初の関東大会出場を成し遂げたことなどから、どのリーグにおいてもトーナメントを勝ち上がる力をつけてきているチームが出てきたことが伺える。

また、リスクを冒さずに攻守においてバランス良く戦うチームが安定した勝ち上がりを見せている。自チームのスタイルを貫こうとするチームがいる中で、千葉明德は、相手の戦い方や試合の状況に柔軟に対応しながら相手の良さを消し、粘り強く戦う姿勢を崩さなかった。さらに、千葉明德は選手交代が効果的に働いたことも印象的であった。準決勝では交代枠を使い切りながら運動量を落とさず、決勝でも交代選手が得点を獲得し、スターティングメンバーだけでなく総合的なチーム力の高さも示した。このような部分もトーナメントを勝ち上がったチームの特徴として捉えられる。

全体的に得点の多くを占めているのはセットプレー。直接合わせるだけでなく、ニアでフリックするプレーやファーでの折り返しに合わせるなど、より守備が対応しづらくなるような変化を付けたプレーが効果的であった。逆に守備においてはFK時に相手を遠ざけるように高めにライン設定をするチームや、CK時にゾーンで立ち危険なスペースを優先して守ることでセットプレーの失点を防ぐ工夫が見られた。しかし、こぼれ球からシュートを打たれないようセカンドボールまで集中を切らさずに体を張ってゴールを守ることには課題が残る。

攻撃についてはアタッキングサードではテンポよくボールと人が動き、コンビネーションや3人目の動きを使いながら崩そうとするなど狙いのあるシーンもあった。しかし、それが得点につながることは少なく、個人力で相手を剥がしてシュートまで持っていく選手であったり、抑えを効かせたミドルシュート、ラストパスの質、フィニッシュに持っていくためのコントロールの質に課題が残る。

守備についてはチームとして前線からプレスをかけようとするチームが多いが、1stDFが相手との距離を詰められないと制限がかからず、後ろが連動できずに間延びするケースが見られた。相手・味方・スペースを観て予測・判断することや味方選手のコーチングを頼りに1人1人の選手がもっとアプローチの質にこだわり、チームで連動したい。

【最後に】

今年度、5/8から新型コロナウイルス感染症の法律上の位置付けが5類に移行したことで、準決勝からは観客制限が概ね解除された。スタジアムにはメガホンを使った仲間の声援が響き渡り、日常が戻ってきたことに喜びを感じる。各会場において多くの観客が見守る中、ピッチに立つ選手たちはエネルギー溢れる試合を展開していた。改めてサッカーができることを幸せに感じる。今大会が開催され無事終了されたこと、また、大会の運営に携わっていただいた全ての方々に感謝の意を表すとともに、優勝した八千代高校、準優勝した千葉明德高校の関東大会での躍進を期待し、令和5年度関東高等学校体育大会サッカーの部千葉県予選会の総評とさせていただきます。